

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K06649

研究課題名（和文）離島集落の構成と社会関係資本の変遷にみる日本型サステイナブル・コミュニティの原則

研究課題名（英文）The Sustainable Community Principles based on Construction and Social Capital of Isolated Islands in Japan

研究代表者

姫野 由香（HIMENO, Yuka）

大分大学・理工学部・助教

研究者番号：10325699

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本の古き良き時代の集落の要件が今も生き続ける離島地域に注目して、日本型サステイナブル・コミュニティの原則を見出すことを目的とした。

人口、産業、生活基盤施設の維持や改善がみられる離島において「共同体、産業、交通、土地家屋、オープンスペース、境界、ゾーニング、生活空間」の8項目を支える「施設」や「社会規範・慣習」について現地調査した。共通項として、集落外から人を受け入れる仕組みがあり、古くからの規範を継承しながら生活環境を更新してきたこと、組織や慣習を時代に合わせて転換する柔軟性が確認できた。その結果、新たな産業の育成や人材の獲得に成功し、人も環境も慣習も更新されていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、持続可能な離島の分析を通して、日本の風土や価値観に基づいたサステイナブル・コミュニティの要件の明らかにしようとした点に、新規性があり学術的意義がある。

そのなかで、コミュニティ内には、辻や境内、公民館といった、そこに行けば誰かがいるといった象徴的なオープンスペース（共有空間）が必ずあることや、コミュニティの境界が慣習や地形により維持されていると、その密度や中心性が保たれることなど、「共同体、産業、交通、土地家屋、オープンスペース、境界、ゾーニング、生活空間」それぞれについて、現在の都市や地域計画に応用できる知見が得られており、社会的意義もあると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The study is on remote islands where the good old days' conditions and atmosphere are still persistent. By analyzing the characteristics of those islands, this research aims to draw principles of the sustainable community for Japanese villages.

The survey was conducted only on the remote islands where population, industry, and infrastructure were maintained or improved. The survey has two parent categories "existing facilities" and "social norms and customs", those are subcategorized by eight elements "community, industry, transportation, land and housing, open spaces, boundaries, zoning, and living spaces."

This research found the healthy communities have three things in common: have a system of accepting people from outside the village, have been renewing one's living environment by inheriting old norms, have the flexibility to change organizations and customs to suit the times.

研究分野：都市計画・地域計画

キーワード：離島 集落 産業 生活 共同体 オープン・スペース サステイナブル・コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

近代日本都市計画の基本的な考え方や手法並びにデザインセオリーの多くは欧米のそれに大きな影響を受けてきた。特に、成長戦略の下で都市化をある部分で容認してきた米国において、これまでの都市計画の「限界」が課題として顕在化してきた現象に、現在の日本は、自らが抱える課題と重ね合わせる面が多いと考えた。その米国で見直されたのは、旧来のコミュニティ（集落）が備えていたサステイナブルな思想やデザインセオリーであり、古き良き時代の地域のあり方から持続可能な地域づくりのヒントを得ようとしたアワニー等の原則が複数提言されている。また、昨今の日本における国土計画のトピックスとして、コンパクトシティ、職住近接、過大な拡張を制御する自然環境保全等々が登場するが、これらはなにも新しいことではない。古くから残る日本の集落でも、これらは叶えられていたと考えられる。

著者は過去の全国離島の調査^{*1}の過程で、圍繞型の集落においては、地域のくらし方と関連する一定の集落構成の傾向があり、それらが現在も必然として残っていることを確認している。その必然たる事由を明らかにすることで、欧米型ではない日本の風土や文化を基壇とする日本型サステイナブル・コミュニティの要件を、離島集落の調査から導きだしたいと考えるに至った。
※1：姫野由香・牧田正裕，規模・基盤・産業・行政施策の経年変化にみる離島の構造特性と類型化—地方における自立的な地域運営・経営に関する研究—，平成21年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書（国土交通省）

2. 研究の目的

本研究では、日本の古き良き時代の集落の要件が、住民の利用により、今も生き続ける地域として離島地域に注目し、そこから見出される要件を精査することで、日本型サステイナブル・コミュニティの原則を見出すことを目的としている。

3. 研究の方法

- (1) 近代の都市論や良好な都市の要件や、集落構成の研究が、如何なる「視点」や「指標」に基づき、論じられているのかを分析し、持続可能な地域の要件を分析する際の視点（調査項目）の一助とした。主に離島や圍繞型の中山間地域を対象としたケーススタディにより、得られた視点（調査項目）を精査し、決定した。
- (2) 既往研究成果^{*1}と離島統計年報を活用し、人口規模や産業、生活基盤施設が維持または向上傾向にある離島を選定し、その風土（地形や気候）、地域性により、研究地域を絞り込んだ。
- (3) (2) で選定した研究地域において、空間解析などの綿密な環境調査を実施することで、対象地域にみられるサステイナブルな集落構成と、それを構成する要素を明らかにする。
- (4) また、(3) で明らかとなった特徴的な集落構成を支える社会的基盤が、如何なる要件（体制や主体、あるいは慣習や産業）によって維持され、また変遷してきたのかを調査した。
- (5) 最後に、近代の都市論の視点(1)や日本の離島集落調査から得られる(3)(4)の視点から、日本型サステイナブル・コミュニティの要件を整理し、今後の地域づくりに有益な知見を得た。

4. 研究成果

(1) 都市論や集落地理学におけるコミュニティを評価する視点

近代に提唱された都市論と集落地理学の双方の視点から、社会共通資本としての集落構成を分析するための評価指標を検討した。さらに、これら文献調査に加え、複数離島でのヒアリング調査とケーススタディにより、集落における生活・生業に関する規範意識や慣習等の社会関係資本に関する評価指標を検討した。その結果「共同体、産業、交通、土地家屋、オープン・スペース、境界、ゾーニング、生活空間」の8つを、離島調査の評価指標として設定した。

(2) 調査対象離島の選定と概要

離島の生活や生業、慣習は、風土や地理的条件等によって多様である。そのため、離島におけるサステイナブル・コミュニティの要件を明らかにするためには、様々なタイプの離島におけるケーススタディを蓄積する必要があると考えた。そこで、離島統計年報を用いて、大部分の離島が減少傾向を示す1975年以降も、数値を維持・改善させている有人離島56島を抽出した。それら離島の、人口や世帯数などの【基本属性】、学校（生徒数）や診療所（従事者数）、交通施設（就航状況や道路整備率）などの【生活基盤】、農業や水産業、観光業に関する【産業構造】の3つの指標^{注1}の増減や維持の程度を、全国の離島の平均と比較しながら、4つのタイプ^{注2}に分類した。さらに、その4つのタイプと地理条件^{注3}をクロス集計することで、多様なタイプのケーススタディ離島を4島選定した。

選定した離島は「人口産業生活基盤安定型×孤立型離島」の鹿児島県黒島、「産業安定型×群島型離島」の長崎県小値賀島、「生活基盤安定型×内海・本土近接型離島」の三重県答志島、「人口安定型離島」の長崎県度島である。4つの離島の概要を図1~4、表1~4に示す。

(3) 各離島を支える社会共通資本と社会関係資本

選定した離島を支える社会共通資本と社会関係資本について、文献調査に加え、現地踏査とヒアリング調査を行った。紙面の都合上、本節では、三重県答志島を例に分析の過程を説明する。図2に示す通り、答志島には答志、和具、桃取の3つの集落があるが、生活基盤施設が集中し、主産業である漁業従事者が最も多い「答志地区」を主な調査対象とした。

○答志島を支える社会関係資本

8つの評価指標のうち、主に社会関係資本に関連する3つの項目について、ヒアリング調査や文献調査を行った。

【共同体】 前述した「世古」は、さらに10組ほどの組で構成されている。組では、積立金をして、冠婚葬祭時の資金にしたり、「禱屋祭^{注5)}」の際には、組の接待役の家で直会を行ったりしている。また「寝屋子制度」という、一定年齢の5～8人の男子を、寝屋子として世話役の寝屋親が預かり、面倒を見る慣習がある。この単位は、組や世古に関係なく構成されており、現在は、進学や就職を機に島を離れる若者も多いが、正月や盆で帰省した際に、寝屋親の元で過ごすなど、形態を変化させながらも、仕組みを継承している。このように、住民が複数のコミュニティに重複して所属して、年齢や性別を超えた共同関係を築いていた。

【産業】 漁協では、1992年から毎週土曜日を休漁日としている。これにより労働環境が向上し、後継者確保が可能になっただけでなく、休漁による資源保護にも繋がっている。また、2014年から、個々人で行っていた海苔の養殖加工を、共同で行うことで、海苔の品質が安定し、価格も向上した。さらに、養殖と加工を分業制にすることで、新たな雇用が生まれている。また、観光客の市場見学を受け入れたり、島内の旅館では、市場で仕入れた魚を提供したりするなど、他産業と連携した（漁観連携）新たな取り組みを行っている。

【土地・家屋】 答志地区では、長男が結婚した際には、結婚後も親と同居することが一般的である。次男以下は独立し分家するが、その際、土地を持っている家族は、新居を建てることもあるが、ほとんどの家庭では3世帯で同居している。

○答志島の増加傾向にある統計項目とその要因

表2にもあるように、答志島では道路整備率、就航状況、医療従事者数が、全離島平均と比べて増加傾向にあり、現在も整備が進められている。医療従事者数増加は、2010年から2015年にかけて、週に1度、常勤医師に代わって非常勤医師が勤務するようになったためであった。また、就航状況については、鳥羽市のバスや市営定期船の利便性向上のために、公共交通の改革を訴えていた市長の当選を機に、定期船が新たに整備されたためであった。

道路整備率は、島の北部の避難港や、避難港から桃取地区までの漁港関連道が整備されたため、著しく増加していることが分かった。これらは主に漁業を支えるための基盤整備であり、答志島の漁業生産額が好調であることが、追い風となっていることがわかる。

○答志島におけるサスティナブル・コミュニティの要件

これまでに得られた知見から、答志島の持続可能性を支えている要件を、他の離島ともに表5と(4)にまとめる。



図5 答志島答志地区の集落構成図

(4) 離島集落の分析からみえてきたサステイナブル・コミュニティの要件

本研究では、鹿児島県黒島、三重県答志島、長崎県小値賀島、長崎県度島を対象に、8つの項目をもとに、サステイナブル・コミュニティの要件を検討した。各離島で得られたサステイナブル・コミュニティの要件を表5にまとめ、複数離島に共通する項目を下線や網掛けで示す。

【共同体】「住民が複数のコミュニティに所属している」、「コミュニティの形態や仕組み等を、時代の変化に伴って柔軟に変化させながら継承している」、「コミュニティに外部からの人材や情報を取り入れる」の3点が共通の要件であった。

【産業】「組織内の内部改革を行っていること」、「外部と連携したり、外部からの人や情報を取り入れる仕組み」、の2点が共通の要件であった。

【交通】「集落間を結ぶことで機能補完を可能にする」、「地区内の道路は旧来の形を残したまま、幹線道路を設けていること」の2点が共通していた。

【土地・家屋】「旧来の土地利用を維持したまま、建物を更新する」が共通の要件であった。

【オープン・スペース】「日常的なコミュニティの場（施設）が存在すること」、「祭事等、集落間の交流を促進する慣習があり、それを支える空間が整備されている」の2点が共通であった。

【境界】「地形による境界によって集落内の密度が保たれている」ことや「地縁やコミュニティによる心理的な境界の存在」の2点が要件であった。

【ゾーニング】については、「集落の密度維持によってミクストユースが実現している」こと、「旧来のゾーニングを維持しながら建物を更新している」ことが共通の要件であった。

【生活空間】では「生活空間がコミュニティに開かれており、時には集落外からの人も受け入れるパブリックスペースとしても利用される」ことが要件として挙げられた。

つまり、①集落外からの人の流動を受け入れる仕組みや環境があり、それを支えるために、②古くからの利用のされ方や規範、立地を継承しつつも、生業に関する施設や広場、家屋といった生活環境（施設）を更新してきたこと、③共同体など、産業にかかわる共同組合や組織、祭事などの慣習を持続させるために、その在り方を、柔軟に転換するなど、挑戦的な取り組みが確認できた。具体的には、人材不足を補うための、組織の統合や合祀、時代の生活習慣に合わせた祭事や行事の転換などである。その結果、新たな産業の育成や人材の育成・獲得に成功し、人も環境も慣習も、更新されていることが分かった。

表5 各離島のサステイナブル・コミュニティの要件一覧表（共通項目まとめ）

	黒島（人口産業生活基盤安定型離島）	答志島（生活基盤安定型離島）	小値賀島（産業安定型離島）	度島（人口安定型離島）
共同体	<ul style="list-style-type: none"> 口祭事等の形態を変化させながら継承 	<ul style="list-style-type: none"> ■世古や集落子などの複数のコミュニティの存在 ■コミュニティの仕組み等を時代に合わせて変化させながら継承 	<ul style="list-style-type: none"> ■秋の大祭など地域外の人もコミュニティの中に入れてくる習慣 ■コミュニティの仕組み等を時代に合わせて変化させながら継承 ■郷やとくだんなどの複数のコミュニティの存在 ■アイルランドツーリズム協会を通して、多様な観光客の受け入れと、その構成員に移住者を採用 	<ul style="list-style-type: none"> 口若手会やまちづくり運営協議会など複数のコミュニティの存在 口まちづくり運営協議会などのコミュニティを通じて外部からの意見を取り入れる機会がある
産業	<ul style="list-style-type: none"> ■外部参入をしやすくすることで新たな技術・人材を取り込む ■地域の雇用創出 	<ul style="list-style-type: none"> ■働き方等の組織の内部改革 口他の産業や外部のものとの連携 	<ul style="list-style-type: none"> ■漁師の意識改革など組織の内部改革 ■財源支援などの外部参入者の誘致 ■アイルランドツーリズム協会の移住者採用等外部からの人材や意見を取り入れる 	
土地・家屋	<ul style="list-style-type: none"> ■旧来の土地利用を維持しながら建物の更新を行う（片治地区） 	<ul style="list-style-type: none"> 口複層棚は複層子のための広い広間を設けた住戸 		<ul style="list-style-type: none"> ■階層屋3層同居など、家族単位で建物を共有する
交通	<ul style="list-style-type: none"> 口地域内の道路は旧来の形を維持したまま、周りに幹線道路を設けられている。大半では集落内に幹線道路が通ったことで集落が分断されてしまった 	<ul style="list-style-type: none"> 口集落間が連続され、施設の機能補完が可能になる 口地域内の道路は旧来の形を維持したまま、周りに幹線道路を設けられている 	<ul style="list-style-type: none"> 口地域内の道路は旧来の形を維持したまま、周りに幹線道路を設けている 	<ul style="list-style-type: none"> 口道路やバスによって、集落間の施設の機能補完が可能になっている
オープンスペース	<ul style="list-style-type: none"> 口地域ごとにコミュニティスペースが設けられている 	<ul style="list-style-type: none"> ■漁港や路地などの日常的なコミュニティの場が存在 口地域の慣習や地縁を支える空間が整備されている 	<ul style="list-style-type: none"> 口日常的なコミュニティの場が存在 口祭事を通して集落間の交流を促進する慣習とそれを支える空間が整備されている 	<ul style="list-style-type: none"> 口新たな施設を整備したことで交流機会の単位や効率化を目指して組織の在り方を見直している 口祭事を通して集落間の交流を促進する慣習とそれを支える空間が整備されている
境界	<ul style="list-style-type: none"> 口地形による地区ごとの明白な境界 口心理的境界（地区ごとの帰属意識・競争心） 	<ul style="list-style-type: none"> 口地形による境界によって、集落内の密度が保たれている 口心理的境界（世古） 	<ul style="list-style-type: none"> 口心理的境界（地区ごとの帰属意識） 	
ゾーニング	<ul style="list-style-type: none"> ■旧来のゾーニングを維持しながら建物を更新 	<ul style="list-style-type: none"> 口集落の密度が維持されていることによってミクストユースに繋がっている（生活と商業） 口旧来のゾーニングを維持しながら建物を更新 	<ul style="list-style-type: none"> 口集落の密度が維持されていることによってミクストユース（島民と来島者が混ざり合う） 口旧来のゾーニングを維持しながら建物を更新 	
生活空間	<ul style="list-style-type: none"> 口自然環境を考慮した家や集落 	<ul style="list-style-type: none"> ■生活空間が commonspace になる（世古や明堂との飲み会） 	<ul style="list-style-type: none"> ■生活空間が時にはパブリックスペースになる（秋の大祭の時に来島者や集落外の人も招く） 	<ul style="list-style-type: none"> ■生活空間が commonspace になる（益ごうれいで集落内の直会）

- 注1) 【基本属性】：離島の基本的な要素となる項目（人口・世帯数）【産業構造】：従来、生活の主体としてきた第一次産業や、近年増加傾向にある観光業等の項目（農業生産額・水産業生産額・観光客数・宿泊施設数・宿泊可能人数）【生活基盤】：交通インフラや教育、医療、福祉等の生活をするうえで重要な要素となる項目（教育施設数・総生徒数・医療施設数・医療従事者数・就航回数・道路整備率）
- 注2) 3つの指標を構成する項目の増減率を算定し、それぞれの指標において増加、維持している項目数が半分以上である場合、その指標について安定的であるととした。その結果、すべての指標において、半数以上の項目が増加・維持傾向にある離島を「人口・産業・生活基盤安定型離島」とした。また、【基本属性】【産業構造】の指標の半数以上の項目が増加・維持傾向にある離島を、「産業安定型離島」とした。【基本属性】【生活基盤】の指標の半数以上の項目が増加・維持傾向にある離島を「生活基盤安定型離島」、それ以外の離島を「人口安定型離島」とした。
- 注3) 【内海・本土近接型離島】本土の中心的な都市から航路2時間圏内にあり、かつ航路の欠航がほとんどないと考えられる離島【外海・本土近接型離島】本土の中心的な都市から航路1時間圏内にある内海・本土近接型以外の離島【群島型離島】本土の中心的な都市から航路1時間圏外にある群島【孤立型離島】上記以外の離島
- 注4) 八幡神社の大祭。「おの衆」と呼ばれる人々が、弓引き神事で使われた的を燃やした灰を、神事の舞台まで運び、住民は灰を奪い合う祭りである。
- 注5) 袴屋祭は美多羅志神社の祭り。各組の「ねぎどん」と呼ばれる人の家に神様が来訪すると言われており、祭事後は組の「トリモチ」と呼ばれる接待役の家で直来が行われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 林孝茂, 姫野由香, 西悠太, 濱田菜波	4. 巻 F-1分冊
2. 論文標題 集落の社会関係資本と大分県姫島村大海地区におけるケーススタディによる社会共通資本の特徴 - 集落の社会関係資本・社会共通資本からみるサステイナブル・コミュニティの要件に関する基礎的研究 その1 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）	6. 最初と最後の頁 573-574
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 濱田菜波, 姫野由香, 林孝茂, 西悠太	4. 巻 F-1分冊
2. 論文標題 大分県姫島村西浦地区におけるケーススタディによる社会共通資本の特徴とサステイナブルコミュニティの要件 - 集落の社会関係資本・社会共通資本からみるサステイナブル・コミュニティの要件に関する基礎的研究 その2 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）	6. 最初と最後の頁 575-576
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 林孝茂, 姫野由香, 西悠太, 濱田菜波, 寺尾勇, 藤田晃亘	4. 巻 58号
2. 論文標題 全国の離島統計年報による持続可能な離島からみる サステイナブルコミュニティの理想に関する基礎的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 217-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Nanami Hamada, Yuka Himeno	4. 巻 12
2. 論文標題 Village B The Characteristic of Formation at ased on Livelihood and Climate - Case Study on the Isolated Island Himeshima In Oita, Japan -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proc. 12th Int. Symp. on City Plann. and Environ. Management in Asian Countries	6. 最初と最後の頁 350-355
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤万葉, 姫野由香, 牛苗, 西悠太, 林孝茂	4. 巻 49
2. 論文標題 集落構成の変容にみるサステナブル・コミュニティの原則に関する基礎的研究 大分県姫島村北浦地区におけるケーススタディその1	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 1199-1200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛苗, 姫野由香, 安藤万葉, 西悠太, 林孝茂	4. 巻 49
2. 論文標題 集落構成の変容にみるサステナブル・コミュニティの原則に関する基礎的研究 大分県姫島村北浦地区におけるケーススタディ その2	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 1201-1202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林孝茂, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 西悠太	4. 巻 49
2. 論文標題 大分県姫島村における生活・生業に関わる重要な景観構成要素の特定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 679-680
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤万葉, 姫野由香, 牛苗, 林孝茂, 西悠太, 濱田菜波	4. 巻 57
2. 論文標題 集落の規範意識・慣習からみるサステナブルコミュニティの理想に関する基礎的研究 - 大分県姫島村におけるケーススタディ -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 617-620
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 濱田菜波, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 林孝茂, 西悠太	4. 巻 57
2. 論文標題 大分県姫島村西浦地区における集落構成 - 集落構成・生活空間特性と季節風・生業の関係 その1 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 609-612
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林孝茂, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 西悠太, 濱田菜波	4. 巻 57
2. 論文標題 大分県姫島村大海地区における集落構成 - 集落構成・生活空間特性と季節風・生業の関係 その2 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 613-616
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林孝茂, 姫野由香, 牛苗, 大堂麻里香, 安藤万葉, 西悠太	4. 巻 56
2. 論文標題 大分県姫島村における生活・生業に関わる重要な景観構成要素の特定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 273-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大堂麻里香, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 林孝茂, 西悠太	4. 巻 56
2. 論文標題 集落構造の変容にみるサスティナブルコミュニティの理想に関する基礎的研究 -大分県姫島村北浦地区におけるケーススタディ-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本建築学会九州支部研究報告	6. 最初と最後の頁 269-272
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 林孝茂, 姫野由香, 西悠太, 濱田菜波
2. 発表標題 集落の社会関係資本と大分県姫島村大海地区におけるケーススタディによる社会共通資本の特徴 - 集落の社会関係資本・社会共通資本からみるサステイナブル・コミュニティの要件に関する基礎的研究 その1 -
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 濱田菜波, 姫野由香, 林孝茂, 西悠太
2. 発表標題 大分県姫島村西浦地区におけるケーススタディによる社会共通資本の特徴とサステイナブルコミュニティの要件 - 集落の社会関係資本・社会共通資本からみるサステイナブル・コミュニティの要件に関する基礎的研究 その2 -
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nanami Hamada, Yuka Himeno
2. 発表標題 The Characteristic of Formation at Village Based on Livelihood and Climate – Case Study on the Isolated Island Himeshima In Oita, Japan -
3. 学会等名 12th Int. Symp. on City Plann. and Environ. Management in Asian Countries
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林孝茂, 姫野由香, 西悠太, 濱田菜波, 寺尾勇, 藤田晃巨
2. 発表標題 全国の離島統計年報による持続可能な離島からみる サステイナブルコミュニティの理想に関する基礎的研究
3. 学会等名 日本建築学会九州支部（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林孝茂, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 西悠太
2. 発表標題 大分県姫島村における生活・生業に関わる重要な景観構成要素の特定
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安藤万葉, 姫野由香, 牛苗, 西悠太, 林孝茂
2. 発表標題 集落構成の変容にみるサステイナブル・コミュニティの原則に関する基礎的研究 大分県姫島村北浦地区におけるケーススタディその1
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牛苗, 姫野由香, 安藤万葉, 西悠太, 林孝茂
2. 発表標題 集落構成の変容にみるサステイナブル・コミュニティの原則に関する基礎的研究 大分県姫島村北浦地区におけるケーススタディ その2
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安藤万葉, 姫野由香, 牛苗, 林孝茂, 西悠太, 濱田菜波
2. 発表標題 集落の規範意識・慣習からみるサステイナブルコミュニティの理想に関する基礎的研究 - 大分県姫島村におけるケーススタディ -
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 濱田菜波, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 林孝茂, 西悠太
2. 発表標題 大分県姫島村西浦地区における集落構成 - 集落構成・生活空間特性と季節風・生業の関係 その1 -
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林孝茂, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 西悠太, 濱田菜波
2. 発表標題 大分県姫島村大海地区における集落構成 - 集落構成・生活空間特性と季節風・生業の関係 その2 -
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林孝茂, 姫野由香, 牛苗, 大堂麻里香, 安藤万葉, 西悠太
2. 発表標題 大分県姫島村における生活・生業に関わる重要な景観構成要素の特定
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究報告
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大堂麻里香, 姫野由香, 牛苗, 安藤万葉, 林孝茂, 西悠太
2. 発表標題 集落構造の変容にみるサステイナブルコミュニティの理想に関する基礎的研究 -大分県姫島村北浦地区におけるケーススタディ-
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究報告
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牧田正裕
2. 発表標題 産業振興とまちづくり：ケーススタディを通じて
3. 学会等名 RCAPS研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野原 卓 (NOHARA Taku) (10361528)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授 (12701)	
研究分担者	牧田 正裕 (MAKITA Masahiro) (60292083)	立命館アジア太平洋大学・国際経営学部・教授 (37503)	